

アメリカ文学に描かれた都市

—New York City の都市像—

岩 山 太 次 郎

I

アメリカ文化の発展の上で都市は大きな役割を果たしてきた。フロンティアの果たした役割の重要性をかって Frederick Jackson Turner が指摘した¹ のと同じように、Arthur Schlesinger は都市の果たしてきた役割を重要視して、

The city, no less than the frontier, has been a major factor in American civilization. Without an appreciation of the role of both the story is only half told.²

と述べているように、都市の存在は大きい。その上、アメリカの都市はヨーロッパなどの都市とは違って、19世紀に入って急激に膨張したものである³、アメリカ人の生活に大きな変化をもたらしたことは容易に推察できる。また、都市の存在が作家たちの想像力にも大いにかかわってくることも予測できることである。

そこで、19世紀初頭以降、都市が急速に膨張しはじめた頃からの、都市を背景とした作品や都市とのかかわりを描いた作品をいくつか検討してみると、少数の強力な例外⁴ をのぞき、多くの作家たちは都市を好感をもつてみていないが、時代の変化とともに見方がどのように変わるかを考えてみたい。

II

作家が都市をどのようにみているかを考える場合、様々な方法が可能であろうが⁵、本論では、都市人口⁶に急激な変化があり、文学史的にもエポックとなる4時期に焦点をあて、文学作品で都市がどのように描かれているかをもっともアメリカ的都市といえる New York を例として検討することにする。

第1の時期としてとりあげたいのは、アメリカン・ルネサンスと呼ばれる時代の内の1840年頃から1850年前後の時期である。1820年の人口調査ではアメリカの都市人口は、総人口の7.2%で、69万人であり、人口10万人以上の都市も New York (12万3000人)と Philadelphia (11万2000人)のみであった⁷。ところが、1840年の人口調査では都市人口は総人口の10.8%になり、その数も2.6倍の184万人に増加し、New York は31万人の人口をもつようになった。さらに、1850年の人口調査では、総人口は2300万人となり、都市人口も総人口の15%に達し、その数350万人となった。この30年間に実に5倍以上に増加したわけである。New York の人口も69万人となり、10万人以上の都市は New York を含め6都市となった⁸。このように1840年代の都市人口の増加率は他の時期に類をみないほど高かった。

第2の時期としてとりあげたいのは、1880年頃からの20年間で、リアリズムの文学が確立し、ナチュラリズムの文学が出現する頃である。1880年の人口調査で、はじめて100万人都市が現われたし、1880年から1900年の20年間に総人口は5000万人から7600万人と増加した。都市人口も1400万人から3000万人に倍加し、これを人口比にすると、28%から40%に増加したことになる。1900年には、人口10万人以上の都市は23都市となり、New York は343万人、Chicago が169万人、Philadelphia が129万人、St. Louis が57万人、Boston は56万人の人口をもつ都市となった。

第3の時期として考えたいのは、1920年代と30年代である。それは、1920年の人口調査ではじめて、都市人口が農村人口（*rural population*）を上回ったことと、ジャズ・エイジにみた都会の華やかさが、大恐慌を経験すると一変して、1930年代は1790年以後のどの10年間とも違って、都市人口の増加が農村人口の増加を下回った時代であるからである。

第4の時期としては、第2次大戦後の作家たちが輩出した時代で、郊外（*suburb*）の人口の急増がみられる1950年代と60年代の20年間である。1950年代を物質文明の繁栄の時代とするならば、1960年代はそれへの反動の時代であり、アメリカ文明が問われたときであり、都市の諸問題もクローズ・アップされた時代であった。

III

1842年、イギリスの小説家 Charles Dickens がアメリカを訪問した。全般的にはアメリカを批判した Dickens であったが、アメリカの都市に関して、これを好意的に受け入れ、Boston の街の美しさや New York の Broadway の立派さに目をみはらせた。しかし、New York の Lower East Side では胸の嘔きを覚え、こう言う：

Here too are lanes and alleys, paved with mud knee-deep, underground chamber, . . . ; ruined houses, open to the street, whence, through wide gaps in the walls, other ruins loom upon the eye, as though the world of vice and misery had nothing else to show: hideous tenements which take their name from robbery and murder: all that is loathsome, drooping, and decayed is here.⁹

Lower East Side はまさに「悪と貧困の世界」（“the world of vice

and misery”) で、物乞いこそいなかったが、放浪者は街にあふれ、貧困と悲惨と悪がはびこっていたことを観察している：

We have seen no beggars in the streets by night and or day; but of other kinds of strollers, plenty. Poverty, wretchedness, and vice, are rife enough where we are going now.¹⁰

New York の Lower Manhattan がこのように貧困と悲惨と腐敗の暗い面をもったところに映ったのは旅行者にだけではなかった。Lower Manhattan がこのような様相を呈しはじめたのは1840年代に入ってからであったらしい。1840年代の Washington Square のあたりが背景になっている Henry James の *Washington Square* (1880) によると、1835年当時は Washington Square は「静かで上品な人目に立たない理想的なところ」(“The ideal of quiet and of genteel retirement”) であったのが、1840年代になると、「騒音でうるさい市」(“shrill city”)¹¹ になったと嘆いている。

また、New York 生れの Herman Melville は1847年から1850年まで Lower Manhattan に住み¹²、1841年から1844年にかけて捕鯨船に乗りこんだ経験をもとにして *Redburn* (1849) を書いた。この小説に New York と Liverpool との類似が指摘されているところがあるが、いずれの市にも「人を押しよける冷酷な群集」(“the same elbowing, heartless-looking crowd as ever”)¹³ がいて、Redburn 青年は人間味のとぼしい Liverpool の市で失望する。New York も同じようなところであったのであろう。

Melville のこのような都市観は1852年出版の *Pierre* ではさらに鋭くなり、1840年代¹⁴ の New York の生活様式や商業主義まで批判する。「まれにみる素晴しさがデリケートで詩的な心を完璧な鑄型にはめたような風景」(“scenery whose uncommon loveliness was the perfect

mold of a delicate and poetic mind”)¹⁵ にかこまれた New York 州北部にあった広大な屋敷をあとにして、異母姉 Isabel をともなって出てきた New York では、「家族は大桶の中で泡のように浮び上っては、こわれる」(“families rise and burst like bubbles in a vat”)¹⁶ はかないものに思えた。Isabel も New York は「空虚で、非人情で、形式ばった生活様式」(“empty, heartless, ceremonial ways”)¹⁷ に満ちていて、舗装道路までが、「冷酷無慈悲」(“hard-hearted”)に見え、地球全体が舗装されたらどんなことになるかと思ひ恐怖を感じる(“Think’st thou, Pierre, the time will ever come when all the earth shall be paved?”)¹⁸ この舗装にも象徴されるように New York は冷酷で、「知性で舗装された」ところ(“paved home of intellect”)で、商業主義の煙ばい都市であった。これらが Pierre を押し、彼はその犠牲になっていったとも言える。

1853年に出版された *Bartleby the Scrivener* の Bartleby も同じく冷酷な都市の犠牲であったと言えよう。彼のいる Wall Street の法律事務所の世界は、表面は活気に満ちている。彼はそこで法律文書の筆字を「黙ったまま血色の悪い顔で機械のように」(“silently, palely, mechanically”)¹⁹ する以外には何ひとつせず、ただ、窓から3フィートのところに立っている「年代といつまでも続く陰のため黒ずんだ高い煉瓦の壁」(“a lofty brick wall, black by age and ever-lasting shade”)²⁰ を見つめている。これは活気ある都市で孤独に生きる人間の姿であり、「宇宙の中で完全に一人ぼっちで、大西洋のまんなかに浮ぶ一艘の難破船のようである」(“... he seemed alone, absolutely alone in the universe. A bit of wreck in the mid-Atlantic.”)²¹ と書かれている。Wall Street は昼間は華やかで活気に満ちていても、夜や日曜日は Petra の町のように荒涼としており、Bartleby には友人もいない。それは正に孤独な世界であった。彼は都市の「内臓する回復されることのない無秩序の犠牲」(“the

victim of innate and incurable disorder”)²² であったと書かれている。

New York は1840年の人口調査では31万人の人口であったのが、わずか10年後の1850年の人口調査では69万人となり、人口は倍増し、人口第2位の16万人の Baltimore に大きく差をつけるほどであった。1840年代の New York は商業的、経済的に大いに繁栄し、活気を呈していたし、1850年には *Harper's Monthly Magazine* が New York から刊行されることから分るように、文化的にも Boston に劣らないほど重要な都市となってきた。しかし、すでにその頃、作家たちは繁栄の背後に騒音を聞き、貧困、悲惨、腐敗を見、孤独な *Bartleby* のような都市の無秩序が生む犠牲を見すごすことはできなかったのである。

IV

New York のこの無秩序さは1880年代90年代になるとより顕著になる。

W.D. Howells は1889年に1880年代の New York を舞台とした *A Hazard of New Fortunes* を書いた²³。この小説には雑誌の出資者の息子 Conrad Dryfoose のように都市の貧民や労働者を助けることに善を見出す青年も描かれているが、主人公 Basil March が New York に見るものは「血迷ったパノラマ」であり、人間は利己的であった：

... the survival of an old hip-roofed house here and there at their angles; the Swiss chalet, historic decorativeness of the stations in prospect or retrospect; the vagaries of the lines that narrowed together or stretched apart according to the width of the avenue, but always in wanton disregard of the life that dwelt, and bought and sold, and rejoiced or sorrowed, and clattered or crawled, around, below, above—were features

of the frantic panorama that perpetually touched his sense of humor and moved his sympathy. Accident and then exigency seemed the forces at work to this extraordinary effect; the play of energies as free and planless as those that force the forest from the soil to the sky; and then the fierce struggle for survival, with the stronger life persisting over the deformity, the mutilation, the destruction, the decay of the weaker. The whole at moments seemed to him lawless, Godless; the absence of intelligent, comprehensive purpose in the huge disorder, and the violent struggle to subordinate the result to the greater good, penetrated with its dumb appeal the consciousness of a man who had always been too self-enwrapped to perceive the chaos to which the individual selfishness must always lead.²⁴

Basil March には New York という都市にはまったく法がなく、無秩序なところに思え、彼は都市の醜悪さ、貧困、悲惨さにたいし批判的になる。そして、彼は都市からそれらをのぞこうとした。しかし、Basil は貧民は空騒ぎに自分を忘れ、中産階級は単調さに自分を忘れ、金持は権勢に奢り自分を忘れていてのを見て、痛みを感じる。彼が願ったのは、そういう都市でこそ、善きにつけ悪しきにつけ、全体はばらばらであってはず、お互いに結ばれているという意識の大切さであるが、New York ではそのようなものは期待できなかった。

Stephen Crane に1890年頃の Lower East Side を舞台にした小説 *Maggie: A Girl of the Streets* (1893) がある。この小説の Lower East Side では、住民たちは貧しくて、汚たなくて、悲惨な生活を強いられていた。彼らの道徳も墮落していて、「建物までもがその内部で

人間性の重みのため震れ、きしんでいた」(“The building quivered and creaked from the weight of humanity stamping about in its bowels.”)²⁵ 全般的なイメージは、そこの生活が表わすごとく暗く、主人公 Maggie が自殺する直前のイメージはその度合を増し、光も遠くに見えるだけで、都会生活特有の淋しさが暗示されている：

She [Maggie] went into the blackness of the final block. The shutters of the tall buildings were closed like grim lips. The structure[s] seemed to have eyes that looked over them, beyond them, at other things. Afar off the lights of the avenues glittered as if from an impossible distance. Street-car bells jingled with a sound of merriment.

At the feet of the tall buildings appeared the deathly black hue of the river. Some hidden factory sent up a yellow glare, that lit for a moment the waters lapping oilily against timbers. The varied sounds of life, made joyous by distance and seeming unapproachableness, came faintly and died away to a silence.²⁶

貧民街に生れ、その目ぐらしの労働者を父にもち、アル中の母とならず者の弟をもつていても、心も姿も美しく育った Maggie であったが、男に欺かれた彼女を自殺に追いやったのは、大都会の暗黒面が彼女の行動と精神を歪めたためだったと言えよう。

同じ頃の都会で犠牲になっていく人間を扱った作品に Theodore Dreiser の *Sister Carrie* (1900) がある。この小説に描かれているのは 1889年の Chicago とその後の 3年間の New York の生活である。Hurstwood と Carrie (Caroline Meeber) にとって New York は新

しい可能性を与えてくれるはずのところであったが、孤独と墮落と貧困におとし入れる都市であった。Lower East Side には失業者があふれていた：

In the city, at that time, there were a number of charities similar in nature to that of the captain's, which Hurstwood now patronised in a like unfortunate ways . . . a daily spectacle which . . . had become so common by repetition during a number of years that now nothing was thought of it. The men waited patiently, like cattle, in the coldest weather—waited for several hours before they could be admitted. No questions were asked and no service rendered. They ate and went away again, some of them returning regularly day after day the winter through.

. . . The men moved up in solemn order. There was no haste and no eagerness displayed. It was almost a dumb procession. . . . They frequent the Bowery and those down-at-the-heels East Side streets where poor clothes and shrunken features are not singled out as curious. They are the men who are in the lodging-house sitting-rooms during bleak and bitter weather and who swarm about the cheaper shelters which only open at six in a number of the lower East Side streets. Miserable food, ill-timed and greedily eaten, had played havoc with bone and muscle. They were all pale, flabby, sunken-eyed, hollow-chested, with eyes that glinted and shone and lips that were a sickly red by contrast. Their hair was but half attended to, their ears anaemic in hue, and their shoes broken in leather

and run down at heel and toe. They were of the class which simply floats and drifts, every wave of people washing up one, as breakers do driftwood upon a stormy shore.²⁷

これは Lower East Side で行列を作り慈善の給食をうけようとする失業者たちの姿である。Carrie とともに New York で一旗あげようとした Hurstwood の墮落と貧困の姿もこの中にあった。Carrie は Broadway の華やかな世界に入り込み、「人生の目的」(“life's object”)²⁸ と思っていたものを手にに入れ、物質的には成功した。しかし、

...she now found herself alone... In her walks on Broadway, she no longer thought of the elegance of the creatures who passed her. Had they more of that peace and beauty which glimmered afar off, then were they to be envied.²⁹

「人生の目的」と思って求めていたものを手に入れてみると、物質主義と経済的不平等さ、社会の無関心などから暖かい人間関係が都会にはないことを知る。そして、華やかさも偽りであり、都会の孤独を知り、幸福でないと思う。

このように都市には明るい華やかな活力のある反面、無気力と貧困と孤独などといった暗い面があったことは、Henry James の目にも映った。1904年、20年ぶりに生地 New York を訪れた James は摩天楼が立ち並びはじめたこの近代大都市にアンビバレントな印象を強烈に抱いた。

James はスカイラインの象徴する活況を生き生きと描いていると同時に、移民たちの居住する地区に感じる無気力と無教養と退廃と無為のために、かつて歴史の欠如を知ってそこを去った時と同じように、人間的可能性のないところと思う：

... the great city is projected into its future as, practically, a huge, continuous fifty-floored conspiracy against the very idea of the ancient graces, those that strike us as having flourished just in proportion as the parts of life and the signs of character have *not* been lumped together, not been indistinguishably sunk in the common fund of mere economic convenience.

The building can only afford lights, each light having a superlative value as an aid to the transaction of business and the conclusion of sharp bargains.

They [the buildings] never begin to speak to you, in the manner of the builded majesties of the world as we have heretofore known such—towers or temples or fortresses or palaces—with authority of things of permanence or even of things of long duration.³⁰

James の心をもっとも苦しめたのは、秩序のない様々な要素が一度に彼の認識の中に現われ、荒々しく、しかも混乱して絶えず動いていることであった：

... “the state of the streets” and the assault of the turbid air seemed all one with the look, the tramp, the whole quality and *allure*, the consummate monotonous commonness, of the pushing male crowd, moving in its dense mass—with the confusion carried to chaos for any intelligence, any perception; a welter of objects and sounds in which relief, detachment,

dignity, meaning, perished utterly and lost all rights. It appeared, the muddy medium, all one with every other element and note as well, all the signs of the heaped industrial battlefield, all the sounds and silences, grim, pushing, trudging silences too, of the universal will to move—to move, move, move, as an end in itself an appetite at any price.³¹

そこにあるものは濁った空気の中でひしめく群集であり、修羅場となった産業社会の騒音と陰気な沈黙であった。

このように James の見た19世紀終りから20世紀初頭にかけての New York には、快適で洗練された生活を作る要素よりも、それを、破壊させる要素の方が大きかったのである。そして、この New York では、同じ言葉を語る同質のコミュニティもなくなっていた。Boston では、衰退していたとは言え、まだ文学的伝統があったが³²、New York はヨーロッパの都市とは違って、すでに建築物の荒地であり、孤独な群集のいる場所になってしまっていた。

V

James が New York で感じたのと同質のことが、1920年代30年代の New York にも描かれている。

John Dos Passos は1925年に New York を小説 *Manhattan Transfer* の場所として取りあげた。彼にとって New York はアメリカで一番混沌としている所であり、そこには都市のもつ強い物理的力があつたが、50人を越える登場人物たちは根本的には結びつきのない人生をたどり、それぞれ孤立していて、共通の興味、関心、信念、価値観などはない。市自身が利己的でシニカルですらあり、市も人物たちも混沌の中で浮き沈みしている。小説の最後の章で、Dos Passos のスポークスマンとも

言える Jimmy Herf は自分の健全さを保持するために選択をせまられる——きれいな服を着てこの市に留るか、よれよれの服を着てこの市を去るか—の選択である。フェリーのところへ戻った Jimmy は去ることを選ぶ。その時 New York の「Chelsea 地区のうんざりする煉瓦建の家々は暗く、川の近くへくると空気は霧で乳白色になった」と記されている：

Jimmy Herf is walking west along Twenty-third Street, laughing to himself. Give me liberty, said Patrick Henry, putting on his straw hat on the first of May, or give me death. And he got it. There are no trolleycars, occasionally a milkwagon clatters by, the heartbroken brick houses of Chelsea are dark The air becomes milky with fog as he nears the river. He can hear the great soft distant lowing of steamboats.

He sits a long time waiting for a ferry in a seedy ruddy-lighted waiting room. He sits smoking happily. He cant seem to remember anything, there is no future but the foggy river and the ferry looming big with its lights in a row like a darky's smile. He stands with his hat off at the rail and feels the riverwind in his hair. Perhaps he's gone crazy, perhaps this is amnesia, some disease with a long Greek name, perhaps they'll find him picking dewberries in the Hoboken Tube.³⁸

Jimmy は人間は本質的には一人であることを悟った。疎外と孤独の中で彼が意識したのは、都市には無関心と非人間性という壁があって、麻痺していて、そのため人間はそれぞれ孤立しているということであった。

The American City Novel (1954) の著者 Blanche Housman Gelfant

は、こういう New York を次のようにまとめている—— New York が与えたものは疎外と挫折と情感の枯渇であって、人物たちは身のまわりの無秩序の中に生き、その無秩序を生活の中に組みこんでいる。不平等を生み、人間による人間の搾取を生む経済的無秩序、腐敗を育む政治の無秩序、浅薄な人間関係しか許容しない社会の無秩序、無責任、飲酒、不貞、混乱という雰囲気の中に人々を埋没させてしまう道徳的無秩序しかない都市である³⁴。

Jimmy にとっては、このような New York は人間として生きるために何処か他の所へ行く途中の通過点であった。魅力はあるが、通過点にしかすぎなくて、それ以外の所に希望を見出すということでは、Francis Scott Fitzgerald の *The Great Gatsby* (1925) も同じである。

この小説は New York 市の近くの Long Island の West Egg を舞台とし、時代設定はジャズ・エイジの1922年から24年である。Jay Gatsby には New York は富とロマンティックな華麗さと永遠性を与えてくれるように思えたところであり、その魅力にひかれていたが、それが空想でしかありえないことを知る。小説はそのような愚かな期待について、悲劇的な物語を展開させているが、最後になって、アメリカの純潔と希望の源泉を中西部に求めている。語り手 Nick Carraway も、この中西部出身の根無し草の友人を東部の権化である New York がその魅力のとりこにし、破滅させてしまったという観念にとりつかれている。

魅力ある New York がその混乱のため、そこでは人間は根無し草であると感じるのは Thomas Wolfe の場合にも言える。1930年代を思い出して、Wolfe はこう書いている：

The life of the great city fascinated me as it had always done, but also aroused all the old feelings of naked homelessness, rootlessness, and loneliness which I have always felt there. It

was, and has always remained for me, at least the most homesick city in the world; the place where I have felt mostly an alien and a stranger.³⁵

後年このように回想したように、Wolfe にとっては New York は「黄金の都」で、名声と富と冒険を求める青春の永遠の都市であったが、それに憧れてやってくる主人公たちが見出したのは不況の無惨な都市であった。*You Can't Go Home, Again* (1940) に描かれた New York には、やつれた顔の人間があふれ、浮浪者、働くにも職のない若者、それにアメリカにさえも見捨てられた人達がいた。彼らはゴミ箱をあさり、汚い公衆便所に住みつき、暖さをもとめて地下鉄の駅の通路のコンクリートの床に古新聞にくるまって眠っているのである³⁶。冷静に見れば New York はジャングルのイメージを呈しており、荒廃と幻滅の姿があった。「都市とは、人間がたえず自らの入るべき扉を見いだそうと探し求めながら、それを見いだすことが出来ずに、永遠に放浪する運命を与えられている所であった³⁷。」*Of Time and the River* (1935) に描かれたこの巨大都市も人間を踏みつぶすだけで、何ひとつ与えてくれるものがなく、挫折のみをのこす所であった：

Gigantic city, we have taken nothing—not even a handful of your trampled dust—we have made no image on your iron breast and left not even the print of a heel upon your stony-hearted pavements. The possession of all things, even the air we breathed, was held from us, and the river of life and time flowed through the grasp of our hands forever, and we held nothing for our hunger and desire except the proud and trembling moments, one by one.³⁸

このように1920年代30年代の New York には、「富の都」としての要素や華やかな面があったが、作家たちの関心は、そのような面とは反対に、貧困、無秩序、非人間性が生み出す暗い荒廃したイメージにあり、孤独や挫折の経験、人間を破滅させる要素が強調されている。

VI

ところが、第2次大戦後の作品になると、無秩序や非人間性が生む挫折や破滅の要素をもった荒廃した都市としての位置づけは変わらないが、華やかな面は影をひそめてくる。

1952年に発表された Ralph Ellison の *Invisible Man* の「私」が New York にやってきた時は、1940年代初頭であるが、その時の New York は「私」には全く非人間的に思え、虚無そのものを感じさせるところであった：

Along the walk the buildings rose, uniform and close together. It was day's end now and on top of every building the flags were fluttering and diving down, collapsing. And I felt that I would fall, had fallen, moved now as against a current sweeping swiftly against me. Out of the grounds and up the street I found the bridge by which I'd come, but the stairs leading back to the car that crossed the top were too dizzily steep to climb, swim or fly, and I found a subway instead.

Things whirled too fast around me. My mind went alternately bright and blank in slow rolling waves. We, he, him—my mind and I—were no longer getting around in the same circle. Nor my body either. Across the aisle a young platinum blonde nibbled at a red Delicious apple as station lights rippled

past behind her. The train plunged. I dropped through the roar, giddy and vacuum-minded, sucked under and out into late afternoon Harlem.³⁹

これが、悪意に満ちた推薦状のため職が得られなく、怒りと失意の中にいる、南部の田舎から出てきた青年の New York での実感であった。彼ははずたずたになり、精神と肉体とは分裂する。上へ通じる階段はけわしすぎて登れなく、突進してくる列車の裏音の中へ落ちていくという象徴的描写の中に、都会という体制が彼を拒否し、無視するように作られていると彼が感じていることがわかる。自分が不服を申し立てたところで、自分は体制に押しつぶされ虐待されるだけであると考え、都会の体制から離脱する道を彼は選び、ハーレムのある地下室に身を沈め、自らを縛る。ここに描かれているのは非人間的の大都会に拒否された人間の虚無感である。

J. D. Salinger も *Catcher in the Rye* (1951) で、Pennsylvania の プレップ・スクールを飛び出して New York へ出てきた16歳の少年 Holden に同じような感情を味わせている：

Anyway, I kept walking and walking up Fifth Avenue, without any tie on or anything. Then all of a sudden, something very spooky started happening. Every time I came to the end of a block and stepped off the goddam curb, I had this feeling that I'd just go down, down, down, and nobody'd ever see me again. Boy, did it scare me. You can't imagine. I started sweating like a bastard—my whole shirt and underwear and everything.⁴⁰

Holden は New York に拒否されただけではなく、New York を頹廢

の場所と思い、そのような “phony” に対して自からも拒否反応を示したのであるが、味う感情は Ellison の「私」と同質である。Holden はそこからの脱出を願った。しかし、脱出した先きが精神病院であったほど、都会（および社会全体）は “phony” に満ち、純真な少年の心を狂わせていたのである。

Saul Bellow が背景に描く New York も主人公たちの心には耐えがたい重苦しさを与えるものである。 *The Victim* (1947) の冒頭の有名な一節は次のようである：

On some nights New York is as hot as Bangkok. The whole continent seems to have moved from its place and slid nearer the equator, the bitter gray Atlantic to have become green and tropical, and the people, thronging the streets, barbaric fellahin among the stupendous monuments of their mystery, the lights of which, a dazing profusion, climb upward endlessly into the heat of the sky.⁴¹

まさに個人を押しつぶすほどの破壊的状況が小説の冒頭から描かれている。このような酷暑の状況は、次から次に起る事件の内的な異常さと合致するもので、心の不安・苦悩はその投影である。

Seize the Day (1956) になると、時代は1955年初頭と設定された New York で、44歳の失職中の男 Tommy Wilhelm は自己という重荷を背負わされている。その重荷は New York 自身の重みでもあり、耐えがたいものである。New York は「複雑でからくりのみち、煉瓦と配管、電線と石材、穴蔵と高層建築の入りまじったこの世の果て」(“the end of the world, with its complexity and machinery, bricks and tules, wires and stones, holes and heights.”)⁴² であって、Tommy Wilhelm は

その重荷に押しつぶされそうになる：

On Broadway it was still bright afternoon and the gassy air was almost motionless under the leaden spokes of sunlight, . . . And the great, great crowd, the inexhaustible current of millions of every race and kind pouring out, pressing round. . . . Faster, much faster than any man could make the tally. The sidewalks were wider than any causeway; the street itself was immense, and it quaked and gleamed and it seemed to Wilhelm to throb at the last limit of endurance. And although the sunlight appeared like a broad tissue, its actual weight made him feel like a drunkard.⁴³

Seize the Day ではまだ「酔っばらいのように目がくらむ」状態であったのが、*Mr. Sammler's Planet* (1970) になると、New York にいる甥を頼ってヨーロッパから移住してきた老 Sammler 氏にとっては、New York は「ナポリやサロニカよりももっと悪くなりつつあった」 (“New York was getting worse than Naples or Salonika.”)⁴⁴ ところで、無秩序で、犯罪は黙認され、困惑するほどの汚濁の都市であった。そして、彼は神にこの地球が吹きとんでしまえばよいと祈りたくなる：

“How long. . . will this earth remain the only home of Man?”

How long? Oh, Jord, you bet! Wasn't it the time — the very hour to go? For every purpose under heaven. A time to gather stones together, a time to cast away stones. Considering the earth itself not as a stone cast but as something to cast oneself from—to be divested of. To blow this

great blue, white, green planet, or to be blown from it.⁴⁵

ここまでくると、都市生活者は都市の崩壊と運命をともにしなければならぬことになる。第2次大戦後の New York を舞台としたこれらの作品では、1880年代90年代や1920年代30年代の作品にみられたような活力、華麗さ、「富の都」といった要素はほとんど影をひそめ、New York に期待をつないでやって来ても、そこで発見するものは、それまで経験したこともないほどの破壊的、破滅的要素であった。都市がこれほどまでになったのと、郊外 (suburb) への人口の急激な移動が始まった1950年代とは、その時期が一致している。ここに郊外住宅地の抬頭の意味のひとつがあるのではないかと思う⁴⁶。

VII

このように、19世紀中葉以降の New York を舞台に展開する文学作品をいくつかみると、すでに19世紀に都市の暗い面がそこに生活する人たちの上に重くのしかかり、その後も都市は同じ要素をはらみつづけ、その度を深め、人間を押し続けてきたことがわかる。描かれている人物たち一人一人は都市の力の前に屈してきた。都市の力は個人個人の人間をのみこみ、その無情さ、冷酷さ、非人間的要素によって、物質的にも精神的にも人間を挫折させ敗北させている。

かつて Emerson はまだ10万人そこそこの人口しかなかった Boston のような都市でも⁴⁷、都市というものは不自然なものであり、道徳的に有害であると信じていた。個人の内なる力が都市の力に屈することに警告を發し、“The Poet” (1844) で Emerson はこう言っている：

If thou fill thy brain with Boston and New York, with fashion and covetousness, and wilt stimulate thy jaded senses with wine and French coffee, thou shalt find no radiance of wisdom

in the lonely waste of the pine woods.⁴⁸

Emerson は都市の力に勝る人間の精神の力の重要性を説いたが、これまでみてきた19世紀以後の都市を舞台とした作品では、人間は都市に押しつぶけられていたのである。

注

1 Cf. Frederick Jackson Turner, "The Significance of the Frontier in American History," *The Frontier in American History* (1920), collected in Harry R. Warfel, Ralph H. Gabriel, and Stanley T. Williams, eds., *The American Mind*, Vol. II (New York: American Book Company, 1963), 898-902.

2 Arthur Schlesinger, *Paths to the Present* (New York: The Macmillan, 1949), p. 233.

3 アメリカ合衆国で最初の人口調査が行なわれたのは1790年であるが、その時の総人口は392万人であった。そして最大の都市は New York で、人口は49,401人であり、以下、第2位が Philadelphia の28,522人、第3位が Boston の18,320人、第4位が Baltimore の13,603人であった。(Cf. *World Almanac and Book of Facts*, 1979, pp. 212-213.)

一方、London は1801年にはすでに864,845人、Paris は547,756人に達していた。[Cf. Adna Ferrin Weber, *The Growth of Cities in the Nineteenth Century: A Study in Statistics* (New York: Greenwood Press, 1969), pp. 46 and 73.] なお、以下、特に必要でないかぎり、人口は概数で記す。

4 古くは Benjamin Franklin がいるが、19世紀では、Walt Whitman が、20世紀初頭では Carl Sandburg が強力な例外であった。Whitman は1856年、East River から Manhattan を望み、その活力を "Crossing Brooklyn Ferry" (1856)で、
Appearances, now or henceforth, indicate What You are,
You necessary film, continue to envelop the soul,
About my body for me, and your body for you, be hung our divinest
aromas,
Thrive, cities—bring your freight, bring your shows, ample and sufficient
rivers,
Expand, being than which none else is perhaps more spiritual,

Keep your places, objects than which none else is more lasting.

(Section 9, ll. 20-25)

と歌い、「マストにかこまれたマンハッタン」を「わたしにとってこれ以上に素晴しくみごとなものがありうるか」(Ah, what can ever be more stately and admirable to me than mast-hemm'd Manhattan?) (Section 8, l.1) と、人口100万人近くなった New York をみたが、それは、「人々が動くのはこの『時間』と『空間』一人間のさまざまな絶望や希望のすべてを内包するこの『時間』と『空間』一の未定の行動」を表現しうることのできる世界をそこにみたからである。そこに、Whitman は自己を多数他者との“oneness”を感じたからである。(Cf. Alfred Kazin, “The Writer and the City,” *Harper's Magazine*, Dec. 1968, 112-113.) (Whitman よりの引用は Harold W. Blodgett and Sculley Bradley, eds., *Walt Whitman, Leaves of Grass* [New York: W. W. Norton, 1965] による。)

Sandburg の場合の都市は Chicago であるが、1910年代には人口が200万人を越えたこの都市は“Stormy, husky, brawling, / City of the Big Shoulders” (“Chicago,” ll. 4-5) であって、彼は都市のもつ力と活力に注目した。(Cf. *Chicago Poems* [1916] [New York: Holt, Rinehart and Winston, 1944].)

5 たとえば、Robert H. Walker が *The Poet and the Gilded Age: Social Themes in Late 19th Century Verse* (Philadelphia: Univ. of Pennsylvania Press, 1963) で試みたように、対象となる時期の可能なかぎりの多くの作品を統計的に処理する方法もあろうし、George Arthur Dunlap が *The City in American Novel, 1789-1900: A Study of American Novels Portraying Contemporary Conditions in New York, Philadelphia and Boston* (Philadelphia: Univ. of Pennsylvania, 1934) で行なったように、地域と時代を限定して、いくつかのパターンに作品を分類し概観する方法もあろう。

6 「都市人口」(urban population) と言う場合、1950年以後の人口調査では、5万人以上の人口をもつ中心都市とそれに隣接する地域(incorporated places 又は urban fringe)の人口をあわせたものをさすが(これを new Standard Metropolitan Statistical Area という)、1790年の最初の人口調査では2,500人以上の人口をもつ“city”や“town”を“urban”としているので、本稿では「“city”の人口」の意味で使用している。また、“New York”という場合、New York City をさす。

7 第3位は Baltimore の6万2000人で、Boston は4万3000人で第4位であった。

8 1位が New York の69万人、以下、Baltimore の16万人、Boston の13万人、Philadelphia の12万人、New Orleans の11万6000人、Cincinnati の11万5000人と続く。

- 9 Charles Dickens, *American Notes in American Notes and Pictures from Italy*, intro. by Sacheverell Sitwell (London : Oxford Univ. Press, 1957), p. 90.
- 10 *Ibid.*, p. 88.
- 11 Henry James, *Washington Square* (New York : The Modern Library, 1950), pp. 21,22.
- 12 Cf. Susan Edmiston and Linda D. Cirins, *Literary New York, A History and Guide* (Boston : Houghton Mifflin, 1976), P. 38.
- 13 Herman Melville, *Redburn* (New York : Doubleday, 1957), p. 260.
- 14 小説 *Pierre* の時代背景は、歴史上の事実への言及などから、ほぼ1840年代と考えられる。Cf. Herman Melville, *Pierre, or, the Ambiguities*, intro. and ed. by Henry A. Murray (New York : Hendricks House, 1962), pp. xxii-xxiii, xxxiii.
- 15 *Ibid.*, p. 4.
- 16 *Ibid.*, p. 8.
- 17 *Ibid.*, p. 28.
- 18 *Ibid.*, pp. 270, 271.
- 19 Herman Melville, *Bartleby the Scrivener*, collected in Scully Bradley, Richmond Croom Beatty, and E. Hudson Long, eds., *The American Tradition in Literature*, Vol. I (New York : W. W. Norton, 1967), 927.
- 20 *Ibid.*, p. 922.
- 21 *Ibid.*, p. 939.
- 22 *Ibid.*, p. 936.
- 23 単行本としての出版は1890年であるが、1889年3月から11月まで *Harper's Weekly* に連載した。この小説は近代都市の社会的、経済的問題を扱った最初の小説と言われるもので、主人公 Basil March は、Howells 自身が1888年に Boston での安定していた地位をすて、文化の中心となっていた New York へ移住したのと同じように、Boston での仕事を放棄して雑誌の編集者となるため New York へやって来た人物である。
- 24 William Dean Howells, *A Hazard of New Fortunes* (New York : The New American Library, 1965), pp.159-160.
- 25 Stephen Crane, *Maggie ; A Girl of the Streets in The Red Badge of Courage and Selected Prose and Poetry* (New York : Rinehart, 1960), p. 5.
- 26 *Ibid.*, p. 63.
- 27 Theodore Dreiser, *Sister Carrie* (New York : Bantam Books, 1958), pp.386-387.

- 28 *Ibid.*, p. 397.
- 29 *Ibid.*, p. 398.
- 30 Henry James, *The American Scene* (Bloomington, Ind. : Indiana Univ. Press, 1968), pp. 92,95-96, 92.
- 31 *Ibid.*, pp. 83-84.
- 23 Cf. *Ibid.*, pp. 248-252.
- 33 John Dos Passos, *Manhattan Transfer* (New York : Bantam Books, 1959), p. 313.
- 34 Cf. ブランチ・H・ゲルフェント著, 岩元巖訳 『アメリカの都市小説』 (東京 : 研究社, 1977) p. 196.
- 35 Thomas Wolfe, *The Story of a Novel* (New York : Scribner's Sons, 1949), p. 28.
- 36 Cf. Thomas Wolfe. *You Can't Go Home, Again* (New York : Sun Dial, 1940), p. 729.
- 37 *Ibid.*, p. 229.
- 38 Thomas Wolfe, *Of Time and The River* (New York : Charles Scribner's Sons, 1935), p. 509.
- 39 Ralph Ellison, *Invisible Man* (New York : The New American Library, 1960), p. 218.
- 40 J. D. Salinger, *Catcher in the Rye* (New York : The New American Library, 1959), p. 178.
- 41 Saul Bellow, *The Victim* (New York : The Viking Press, 1956), p. 3.
- 42 Saul Bellow, *Seize the Day* (New York : The Viking Press, 1961), p. 83.
- 43 *Ibid.*, p. 115.
- 44 Saul Bellow, *Mr. Sammler's Planet* (Greenwich, Conn. : Fawcett Publications, 1971), p. 10.
- 45 *Ibid.*, p. 50.
- 46 郊外生活者を扱った小説については, 拙稿「小説に描かれた1950年代の都市と郊外の生活」(『同志社アメリカ研究』No15, March 1979, pp. 119-128)を参照願いたい。
- 47 Boston の人口は1820年には約4万人で, 1850年に約13万人になる。
- 48 Ralph Waldo Emerson, "The Poet" in *Selections*, ed. by Stephen E. Whicher (Boston : Houghton Mifflin, 1960), p. 235.

(本稿はアメリカ学会第15回大会(1981年3月31日)のシンポジウム「都市とアメリカ文化」における報告をもとにしている。)